

ノートン・T・ダッジ著『ソ連経済における女性—
経済、科学および技術の発展における彼女らの役割—』

Norton T. Dodge, *Women in the Soviet Economy,
Their Role in Economic, Scientific, and Technical
Development*, 1966, The Johns Hopkins Press,
Baltimore, xv+331 pp.

ソ連では、女子労働力が多方面に活用されている。たんに量的に多だけでなく、他の国では普通男子の
額分と考えられているような分野にまで女子が進出している。その原因は、何といても、労働力不足であ
る。革命、肅清、戦争のため多数の男子が死亡し、性比は著しく低下した。1946年、全人口の性比は74.3%
であり、35～59歳では59.1%、60歳以上では51.9%であった。1959年、全人口の性比は若干回復した(81.9%
)、35～59歳のそれは60.6%、60歳以上のそれは50.8%で、依然としてアンバランスである。

それにもかかわらず、強力な成長政策がとられ、女子労働力の活用は不可避であった。そのため、託児所
やカフェテリアなど必要な施設が準備されたが、それでも女性にとって仕事と家庭の二重の負担は重く、出
生率は低下している。それが将来の労働力不足をひきおこすという矛盾をまぬかれることはできない。

ソ連では、女子が重い肉体労働に使われているという点も一つの特徴であるが、頭脳労働でも女子の進出
が著しい特徴になっている。しかし、専門的・技術的職業にもランクがあり、ランクが高まるほど女子の割合
は少ない。男女同権が保証されている中でも、事実上、女性の地位に差異があらわれることは興味あるこ
とがらである。

本書の著者は、ソ連経済を専攻するアメリカの学者であるが、豊富な資料を使って、ソ連経済における女
性の地位について、以上の論点を含めて幅広い分析を行なっている。本書の構成は、I. 緒論、II. 雇用に
影響する人口学的要因、III. 労働力率、IV. 雇用に影響する社会的・経済的・法的要因、V. 家庭と仕事、
VI. 教育と訓練、VII. 専門的訓練、VIII. 学歴、IX. 非専門的職業、X. 半専門的・専門的職業、XI. 専門的
活動、XII. 科学・技術における活動、XIII. 総括と結論となっている。

著者の関心は、実情を統計的に明らかにするのみでなく、ソ連で女子労働力が利用されている原理を明ら
かにする点におかれているように思われる。この点について、たとえば次のような見解がのべられている。
「ソ連体制が女性に対して抱く態度は、われわれのような非計画的、個人主義的社会のそれとは大いに異っ
ている。われわれの社会では、個人の福祉を社会の基本目標とみる理念がもたれているので、女子の教育は
男子の教育と同様、それ自体を目的として望ましいものとみている。われわれの教育の多くは職業を目ざし
たものであるけれども、若い女性が結婚後、そのために訓練された職業をつづけることを止めても、彼女の
教育がむだになったとは考えられない。家庭をもつこと自体が、社会の福祉に対する十分な貢献と考えられ
出来ればそういう脱線からつれもどされて“生産的”職業につけられるべきだとは考えられないならわしに
なっている。これに対して、ソ連では、女性を経済的資産または資源とみ、できるかぎり開発し、有効に活
用すべきだとみている。この態度は、いうまでもなく、経済成長を促進するという体制の絶対的目標、ソ連
の経済政策を1920年代以降支配してきた目標を反映するものである。」(245～246ページ)。

たしかに、この論点は女子労働力の政策を考える場合の最も重要なポイントであり、現在、わが国でも女
子労働力の活用がいろいろの立場から論議されているおりから、十分に考慮が払われるべき点である。その
意味で、本書に取り上げられているいろいろのソ連の事例はひとつの実験例として参考にされるべきである。

(岡崎 陽一)